

宮古島の「現在」をドキュメントする

—消滅危機言語の言語復興へのアプローチ—

藤田ラウンド幸世

日本社会にも、2050年までに消滅するかもしれない危機に瀕している言語がある。ユネスコによる世界の危機言語地図には、アイヌ語（北海道）、八丈語（東京都）、奄美語（鹿児島県）、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語（沖縄県）が記載されている。一つひとつの言語の歴史的な文脈、地理的、社会的、環境要因は異なるが、こうした言語の持続可能性を考えるとESDの概念を応用し、そこから学ぶことはできないだろうか。

1. はじめに

インターネット上のユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の世界の危機言語地図（Atlas of the World's Languages in Danger）に、日本社会の消滅危機言語として8言語が記載されている。2050年には消滅するかもしれない、存在の危機に瀕している言語である。

本稿では、消滅危機言語の未来への持続可能性を考える試みとして、筆者が沖縄県宮古島市の研究フィールドで記録、撮影したドキュメンタリー映像の断片を紹介する。

2. 言語の多様性

2.1 言語の多様性と消滅危機言語の関係性

21世紀現在、日本には、1) 先住民言語のアイヌ語と琉球王国時代からの琉球諸語、2) 19世紀から日本に移住をしたオールドカマーの母語である韓国語や中国語、3) 1990年改定入国管理法に伴い移住した、日系人を中心としたニューカマーの母語であるポルトガル語やスペイン語、4) 非漢字圏のニューカマー移民の母語であるフィリピン語やネパール語等、また、5) 書記言語でも音声言語でもない「手話言語」の日本手話など、「日本語」以外の言語が現存し、日本社会の中にこのような言語の多様性が存在している。（Fujita-Round & Maher, 2017）。

しかし、この多様性はただ単に言語の広がり意味するのではなく、1868年の明治維新を起点とする日本の近代化に関わる「言語」の多様性に限定されているといえる。明治維新を経て、1869年にアイヌの地は北海道に、1879年に（当時は「琉球藩」であった）琉球王国の島々は沖縄県と鹿児島県にそれぞれ日本の新たな行政単位に組み込まれた歴史がある。モーリス＝スズキ（2014:26）は、1740年代には占守島という島では交易所や教会が置かれ、地元のアイヌの人たちがロシア人貿易業者や兵士、宣教師らの影響を受け、急速にロシア化が進んだことから、日本は北方の国境線を守るためにアイヌを日本人であると定義し直すことが必要だったと指摘する。

まず、明治時代の国家による言語政策として、東京の山の手ことばを基盤とした「標準語」を採用し、1886年の学校令発布後、この「標準語」を学校の教授言語として普及させた（Carroll 2001）。その結果、日本の社会言語として定着し、現在の消滅危機言語の衰退の一因となったことは

否めない。イ（1996:262）がいうように戦前は「標準語制定」という名のもとに方言が卑しむべきことばとして貶められ、「標準語」という概念は明治以降の方言撲滅運動のシンボルともなった。方言の話し手は自分の母語に対する深い劣等感をうえつけられ、実際、学校で方言を口にした生徒の首にみせしめの「罰札」制度、すなわち「方言札」が使われ方言弾圧が行われた。

こうして21世紀現在、標準語化された「日本語」は、日本社会の中での「共通語」となった。一方で、2003年にユネスコの専門委員会から日本に勧告され、2009年にはユネスコのインターネット上の世界の危機言語地図に記載された日本国内の8言語の消滅危機言語は、現在では話者数が減少し消滅の危機に瀕している。先述したように近代化の中で日本語が「標準語」となり力を持つようになったことから、日本社会の文脈の「言語の多様性」では日本語が社会の中で高い地位を持ち、その他の言語は「日本語」と相対化したときに社会的地位が低いと認識されることが現状であろう。ここでは、同じ「言語」であっても、マジョリティとマイノリティと対立している構造の上で成り立つものであると理解できる。独立した体系や構造を持つ「言語」とはいえ、実際には言語間に社会的な力関係が働き、多様性の「多」をなす言語は等しく並んではいない。

「日本語」の高い地位はまた、時に「単一言語」、「単一文化」の国という言説となって現れることがある。消滅危機言語ではあるが、ユネスコという国際機関から日本国内の8言語が認定されている以上は、日本の外からみた場合に日本語以外に8言語の言語が現存していると理解される。つまり、日本国内での言説に囚われていると、本来の「言語の多様性」に気づくこともないまま、「単一言語国家」という狭い言説の中で完結することになる。

2.2 消滅危機言語の今現在

消滅危機言語の一つひとつの言語は、歴史的な文脈、地理的、社会的、環境的要因において異なるものである。

ここでは、日本国内の消滅危機言語と名指されている8言語をユネスコの世界の危機言語地図上で観て、これらの消滅危機言語の特徴をまず捉えてみたい。地図の北から南に向かって、アイヌ語（北海道）、八丈語（東京都）、奄美語（鹿児島県）、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語（沖縄県）の8言語である。

図1で確認できることは、まず、8言語は日本の国境の



図1. ユネスコの世界の危機言語地図上の日本
 引用元: ユネスコ世界の危機言語地図 (UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger, © UNESCO, <http://www.unesco.org/languages-atlas/>)

周縁に位置していることである。また、危機言語世界地図の上には危険度が色別され、アイヌ語は「極めて深刻 (critically endangered)」、八重山語、与那国語が「重大な危機 severely endangered」、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語が「危険」と示されている。この世界の危機言語地図第3版の編者であるMoseley (2010) によると、6,000の現存する言語は21世紀末までにはその半分の3,000になると予測されているという。今世紀、3,000語近くの言語が消滅に瀕しているという推測である。

2.3 言語復興とESD

消滅危機言語を言語として習得するメリットは、学校教育で重要とされる「国語」の日本語や「国際語」の英語と比較するとさほど感じられないかもしれない。習得したとしても、「使える」場や相手が限定されており、また、言語教育の専門的知識を持つ人的リソースが集中する都市からは距離があるばかりか、高等教育機関がない地域も多いため、現実問題としてこうした人的・物的共に学習リソースが中央と比較して不足していることも指摘できる。

こうした言語復興の実践には、言語の習得計画が不可欠となり、言語話者を増やすことが一つの目的となる。

言語復興に際して重要なことは、それぞれの言語には「母語話者」がいることである。母語話者一人ひとりには、家族や親族がいて、コミュニティもある。そこでは、習得計画の方法や規模としてむしろ国からの義務や強制のトップダウンではなく、身近なコミュニティ全体で言語復興に取り組むという意識を持つことが一つの鍵になると考えられる。そうした「環境」を醸成する上では、ESD (Education for Sustainable Development: 持続可能な開発のための教育) の理念である、「持続できる」、「(学習素材の) 開発」、「そのための教育」はキーワードとなりうる。

阿部 (2011:209) は、ESDの「持続可能な開発のための教育」を二つに分け、以下のように述べている。一つは、

持続可能な開発の視点としての「環境」、「経済」、「社会」である。この基底には、自然環境の持続、すなわち「物質循環」と「生物多様性」があり、これによって我々の生活は営まれていることもあり、従って、「経済」が私たち人類の社会的な福利厚生を維持しているシステムだと考えれば、「経済」は我々を取り巻く「環境」の一部だとみなすこともできる。つまり、3つの視点は、独立しているというよりも、柔軟に重なりあうものだろう。もう一つは、「家族・近隣・民族・国家・世界といった空間的視野」と「来週・数年先・生涯・子供達の生涯といった時間的視野」を広げるための教育が持続可能な社会の形成につながるということである。

ESDが、どのような人間を育成するのかというビジョンを、このような視点と、空間的視野と時間的視野を広げるための教育と結びつけるのであれば、そのゴールは消滅危機言語の言語復興にも重ねることが可能ではないか。

3. 研究と映像とのコラボレーション

3.1 宮古島の概要

宮古島は沖縄島から約300km南西に位置する先島諸島の一部である。宮古島群島は、宮古島、大神島、池間島、伊良部島、下地島、来間島、多良間島、水納島の8つの島々から形成されている。図2は宮古島諸島の地図である。



図2. 宮古島諸島
 出典元: Map-Miyako Islands Creative Commons に著者が番号を付記。

その中で沖縄県宮古島市は、2005年に市町村が合併され、現在では図2に示した1から6の6つの島からなる。2018年2月において、宮古島市の人口は総人口54,516人である。

3.2 宮古島のことば: みゃーくふつ (宮古語)

現在、宮古語について、宮古島市全体でどのくらいの人数が話せるかなどの話者に関する大規模調査はされておらず、その全体数はわからない。しかし、宮古語の語彙や体系についての調査は一定数あり、今後も言語については記述がされるだろう。

宮古語の研究の難しさは、宮古語内の音声、語彙の差が大きいことである。青井 (2013) は、宮古語の下位として、宮古ことば、大神ことば、池間ことば、伊良部ことば、多良間ことばの5つを区分した。また、宮古語話者について、「宮古語を流暢に話すことができるのはだいたい60歳代以

上であり、それよりも下の世代になると宮古語を話せない方が増え、20-30歳代では聞き取ることも難しくなる」(青井, 2013:88)という。ペラルル、林(2012)らは、宮古語は南琉球語に属していることは確かなものの、「宮古語」とはいえ、集落ごとに異なる宮古語のバリエーションがあり、その数は30から40の宮古語の方言が存在すると述べている。

3.3 フィールドワークの還元：誰のための研究なのか

筆者は、社会言語学として消滅危機言語の宮古語と日本語のバイリンガリズムを調査する目的で2012年から宮古島に通い始めた。これまでに、宮古島市久松中学校での3年間に亘る縦断的アクションリサーチ、すなわち約40人の2クラスの子どもの自らの自尊感情に働きかける教育実践と中学生1年生の言語意識の調査報告(藤田ラウンド, 2015)、また、宮古島を具体例として、消滅危機言語コミュニティの今後の言語教育政策の課題(藤田ラウンド, 2016)を執筆した。

現地に通い始めて3、4年目に宮古語話者たちとの関係が熟したことから、これまでの学術的な報告や論文ではなく、当事者の方々に還元できる方法としてドキュメンタリーの撮影を開始した。

4. 研究と映像の両面からドキュメントする

2015年3月から2017年7月まで筆者と研究協力者の服部かつゆき氏とが撮影をし、協議の上、服部氏が編集を行ったのがドキュメンタリー映像(2018年8月完成予定)の「みゃーくふつの未来：消えゆく声、生まれる声」である。平成27-29年度科学研究費基盤研究(C)15K02659「日本のマルチリンガリズムの総合的研究：多文化共生につながる教育を求めて」の成果でもある。

次にドキュメンタリーの中から5つの場面を取り上げる。

4.1 先人からの黄金言葉

仲間豊吉さん(80代・久松出身)

「アガタヌ ウトゥザユズヤ トゥナズヌマス。あがたというのは遠い親戚よりも近い隣近所がいいですよ



ということです。遠くの親戚よりも隣近所の人がいざという時には助けになると。遠くの親戚より近くの他人ということです。頼りになるのは子供よりも遠くにいる子供よりもその宮古の身近にいる隣近所の人が力になってくれると。こういう風な、宮古の、昔の先人たちのくがにくとうばなんですよ。」

くがにくとうば(黄金言葉)とは格言のことで、先人たちの知恵(遺産)でもある。宮古語の格言は数多く残されており、80代、90代の島民の日常生活の中ではいまだに使われている。

4.2 はーりー(舟漕ぎ)の記憶

與那覇チヨ(90代・久松出身)

與那覇シヅ(80代・久松出身)

シヅ：フニクズウチヤ ミドウンヤ、ゴチソウユツフィ シャーカカラウ、ツフイーウツギシテイ



{舟漕ぎ(はーりー)には、女性は御馳走を作って、早朝からいそがしかった。作り終えてから}

チヨ：フニクズウチヤ、パタユ アギ イズアアガズンチ {舟漕ぎ(はーりー)とは、旗を上げ西東と}

はーりーは、沖縄県全域で旧暦の5月4日の日に行われる海神祭である。チヨさんたちの住む久松では、今でも、儀式の御願(うがん)ばーりー、チーム対抗戦、久松伝統獅子舞、すもうは集落の一大行事である。モノが少なかった時代、女性たちが忙しくとも、誇らしく、暗いうちから準備をしていたハレの日の早朝の勢いは今はないだろう。

4.3 方言札の記憶

與那覇義彦(70代・久松出身)

與那覇昭雄(70代・久松出身)

昭雄：今の若い子には方言の継承ができない状態、標準語励行できたからね。昔は方言使ったら大変だったんだよ。罰されて。



藤田ラウンド：今ちょうどその話をしていたところなんですけど、やっぱり方言札

昭雄：方言札、廊下に立たされてね。

藤田ラウンド：あったんですね。

昭雄：うん、授業も受けられないぐらいの厳罰だったよ。僕らは廊下に立たされたよ。

久松漁港を通りかかったお二人と話し始めると、宮古語の継承の話から、学校の方言札、標準語励行の話にまで及んだ。そこからわかったことは、標準語を使うことが今週目の目標であり、「標準語励行」は教室の黒板にも書かれ、学校全体で行われていたことである。

4.4 民話「通り池の人魚の話」

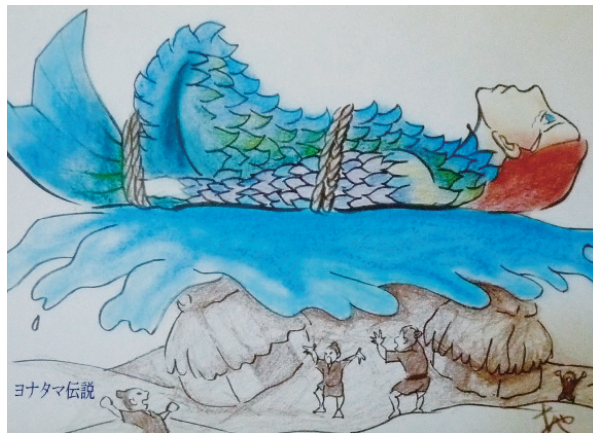
担任教師：通り池の人魚の話。昔、下地島にきどまりという村があったそうです。村には東と西に並んだ二軒の家がありました。ある晩東の家の主が漁に出て、一匹の不思議な魚を釣りました。それは、頭が人の形で体は魚という珍しい、よなたま、人魚でした。

本読みボランティア：よなたまー、よなたまー。

2016年度に久松小学校の5年生、2クラス合同の特別授業の中で、宮古島市伊良部に伝わる「よなたま(人魚)」の民話が題材となった。担任教師は日本語で、本読みボランティアは宮古語で読みあげる授業だったが、1年半後に



宮古島市立久松小学校 善元幸夫氏（東京学芸大学兼任講師）の「国際理解教育」特別授業



©さどやませいこ氏の許可を得て記載

何人かの子ども達に聞いたところ、この民話と授業をよく覚えていた。

4.5 島のおばあたちにインタビュー

宮古島市の北に位置する池間島（人口約600人）では、NPO法人いけま福祉支援センター・池間いきいき教室の高齢者たちが活躍する。中学生が総合学習の時間でおばあたちに取材、パワーポイントにまとめ、最後におばあたちの前で発表し、学童の子ども達もおばあたちから宮古語（池間口）を習うなど、おばあたちは毎年卒業式にも出席し、島の子どもたちの成長を見守る。



総合学習の時間で交流する宮古島市立池間中学生といきいき教室の高齢者

5. おわりに

言語政策という過去があり、その過去によってもたらされた消滅の危機に瀕している言語がある。しかし、現在でも80-90代は日常生活のみゃーくふつを話すことが多い。下の世代は、聞いて理解はできるが上の世代ほどの豊かな語彙力はない。

しかし、宮古語の未来のために、現時点でもできることはある。過去に戻るのではなく、従来とは違う方法で「現在」を記述する、空間的視野と時間的視野を広げることが可能かもしれない。新たな宮古語の話者を育てるために「現在」の知恵が試されているのだろう。今後も、ドキュメンタリーなどのデジタル映像で「現在」を記述することで、消滅危機言語の持続可能性の議論につなげていきたい。

引用文献

Carroll, T. (2001) Language planning and language

change in Japan: East Asian perspectives. Richmond/Surrey: Curzon Press.

Fujita-Round, S. & Maher, J.C. (2017) 'Language Policy and Political Issues in Education' in T. McCarty & S. May (eds.) Encyclopedia of Language and Education (3rd edition), Vol. 1, NY: Springer, 491-505

Moseley, Christopher (ed.) (2010) Atlas of the World's Languages in Danger, 3rd edition Paris, UNESCO Publishing. Online version: <http://www.unesco.org/culture/en/endangeredlanguages/atlas>

阿部治「持続可能な社会とESDの役割」鳥飼玖美子・野田研一・平賀正子・小山亘編著『異文化コミュニケーション学への招待』みすず書房、2011、pp.200-217

青井隼人「『宮古語』概説」沖縄大学地域研究所編『琉球諸語の復興』芙蓉書房出版、2013、pp.87-98

イ・ヨンスク『「国語」という思想』岩波書店、1996

テッサ・モーリス＝スズキ『日本を再発明する—時間、空間、ネーション』以文社、2014

藤田ラウンド幸世「学校教育の中で言語継承への気づきを育てる—沖縄県宮古島市での自尊感情につなげる教育実践」『教育研究』Vol.57、2015、pp.175-182

藤田ラウンド幸世「消滅危機言語コミュニティから日本の言語教育政策を観る—宮古島の景観から」桂木隆夫・ジョンC.マーハ編著『言語復興の未来と価値—理論的考察と事例研究』三元社、2016、pp.47-68

ペラール・トマ&林由華「宮古諸方言の音韻」木部暢子『消滅危機言語の調査・保存のための総合的研究』国立国語研究所、pp.13-51

藤田ラウンド幸世（ふじたらうんど・さちよ）国際基督教大学客員准教授。ESD研究所特任研究員。国際基督教大学大学院修了（教育学博士）。専門は、社会言語学、応用言語学、異文化コミュニケーション。研究テーマは日本のマルチリンガリズム、バイリンガル教育など。近年の出版物は、Fujita-Round, S. & Maher, J.C. (2017) 'Language Policy and Political Issues in Education' in T. McCarty & S. May (eds.) Encyclopedia of Language and Education (3rd edition), Vol. 1, NY: Springer, 491-505、他がある。